

学位論文要約

大学生の大学受験のとらえ方に関する研究
——キャリア形成につなげるために——

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 学習開発学分野
学習開発基礎・支援領域

D181863 堀井 順平

目 次

第1章 本研究の問題と目的

- 第1節 大学生の大学受験のとらえ方に着目する意義
- 第2節 大学受験のとらえ方尺度の開発（研究1の背景）
- 第3節 大学生の大学受験のとらえ方の特徴（研究2の背景）
- 第4節 大学生の大学受験のとらえ方がキャリア形成に及ぼす影響（研究3の背景）
- 第5節 大学受験のとらえ方が否定的な大学生に必要な大学内の支援（研究4の背景）
- 第6節 大学受験のとらえ方が否定的な大学生に必要な個人内の資源（研究5の背景）
- 第7節 本研究の目的と意義

第2章 実証的研究

- 第1節 大学受験のとらえ方尺度の開発と過去のとらえ方尺度との対応関係（研究1）
- 第2節 個人属性と大学受験期の努力の程度による大学受験のとらえ方の差異（研究2）
- 第3節 大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異——教員養成系学生と非教員養成系学生の比較——（研究3）
- 第4節 非第1志望学生の大学受験のとらえ方を規定する大学適応感とソーシャルサポート——キャリア選択自己効力感につなげるために——（研究4）
- 第5節 大学受験のとらえ方の変容に寄与するセルフコンパッションとソーシャルサポート——短期縦断的調査による検討——（研究5）

第3章 総合考察

引用文献

第1章 本研究の問題と目的

第1節 大学生の大学受験のとらえ方に着目する意義

大学生に共通する重大な過去の経験として「大学受験」が挙げられる。これまで、ネガティブな経験の後にポジティブな意味を見出すことがアイデンティティ達成などにつながる（Watanabe, 2017 など）ことが明らかにされており、大学入学時点で大学受験を否定的な経験としてとらえている場合、入学後に大学受験のとらえ方を肯定的なものにすることが重要であろう。そこで、本研究では、現時点で、過去をどのようにとらえているかを表す「過去のとらえ方」（石川, 2013）を援用した「大学受験のとらえ方」について考えることとし、「現時点で、自分の大学受験をどのようにとらえているか」と定義する。

第2節 大学受験のとらえ方尺度の開発（研究1の背景）

これまで、大学生の大学受験のとらえ方を測定し、信頼性と妥当性が確認された尺度は開発されていない。そこで、研究1では、大学受験のとらえ方尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討する。

第3節 大学生の大学受験のとらえ方の特徴（研究2の背景）

次に、入学した大学が第1志望ではなかった大学生（以下、非第1志望学生とする）は、第1志望の大学生（以下、第1志望学生とする）よりも、大学受験を否定的にとらえやすいなど、大学生の大学受験のとらえ方が一定の特徴を示す可能性がある。そこで、研究2では、個人属性による大学受験のとらえ方の差異について検討する。これにより、大学受験のとらえ方が否定的な大学生の属性を実証的に示し、大学受験のとらえ方をより肯定的なものにする必要がある大学生の特徴を見出すことが可能となるであろう。

第4節 大学生の大学受験のとらえ方がキャリア形成に及ぼす影響（研究3の背景）

では、大学受験のとらえ方は、大学生のどのような側面にどのような影響を示すのであろうか。大学生は学校から社会・職業への移行準備の時期にあり、キャリア形成を大学在学中から進める必要がある。これまで、キャリアを選択する上で必要な課題を遂行する能力に対する自信を表す「キャリア選択自己効力感」(Taylor & Betz, 1983) が、大学生のキャリア形成に重大な影響を及ぼすことが明らかにされている（安達, 2001 など）。

また、安達（2006）は、過去の経験を捉え直すことが自己効力感の改善に寄与すると論じており、大学入学後に大学受験のとらえ方をより肯定的なものにすることは、キャリア選択自己効力感の向上に寄与することが考えられる。そこで、研究3では、大学受験のとらえ方をタイプに分類し、それらのタイプ間でのキャリア選択自己効力感の差異について検討する。これにより、大学入学後のキャリア形成において、大学受験のとらえ方をより肯定的なものにすることの重要性についての示唆を得る。なお、免許取得を卒業要件としない大学に所属する大学生（以下、非教員養成系学生とする）も、教員養成系大学に所属する大学生（以下、教員養成系学生とする）のような特定の免許取得を卒業要件とする目的養成系大学に所属する大学生も、キャリア選択自己効力感の向上は重要であるが、双方の大学生ではキャリア選択の問題の性質が異なると考えられる。そこで、研究3では、教員養成系学生と非教員養成系学生の双方を対象とし、別々に分析を行う。

第5節 大学受験のとらえ方が否定的な大学生に必要な大学内の支援（研究4の背景）

続いて、大学受験のとらえ方が否定的な大学生が、そのとらえ方を肯定的なものにする

ような支援方策を提言するために、大学受験のとらえ方の規定因に着目する。これまで、過去のとらえ方が現在の状況に規定されることが実証的に示されている（石川，2019）。特に，大学生にとって，現在の状況を表す指標として，大学適応感が挙げられる。このことから，大学受験のとらえ方は大学適応感に規定されると考えられる。

さらに，研究4では，大学適応感と大学受験のとらえ方の規定因として，ソーシャルサポートを取り上げる。これまで，大学適応感に正の影響を及ぼすサポートとして，友人と教職員のサポート（小山田・児玉・大塚，2013など）が取り上げられている。ただし，友人と教職員のサポートは，サポートの種類によって，大学適応感に及ぼす影響が異なる可能性がある。そこで，大学適応感の規定因として，サポート源（友人，教職員）と種類（情緒的，道具的）を組み合わせた4つのサポートを設定する。

以上より，研究4では，第1志望学生を比較対象として，非第1志望学生において，ソーシャルサポートが大学受験のとらえ方に直接的に，かつ大学適応感を媒介して間接的に影響を及ぼし，キャリア選択自己効力感につながるという仮説モデルを設定し，検証する。

第6節 大学受験のとらえ方が否定的な大学生に必要な個人内の資源（研究5の背景）

大学受験のとらえ方が否定的な大学生に対しては，大学内の支援に加え，個人内の資源の活用も重要であろう。そこで，個人内の資源として，セルフコンパッション（Neff，2003）を取り上げる。セルフコンパッションとは，失敗や至らなさ，個人的苦痛を感じる状況における，思いやりに溢れた自己との関わり方のことである（宮川・谷口，2016）。大学入学時点で大学受験を否定的にとらえている時，自分に対して思いやりをもって関わることにより，大学受験の否定的なとらえ方が緩和されると考えられる。また，セルフコンパッションは，大学適応感の向上に有益であり（Hope，Koestner，& Milyavskaya，2014），介入によって向上可能であること（Smeets，Neff，Alberts，& Peters，2014）も示されている。そこで，研究5では，大学受験のとらえ方が否定的な大学生において，大学入学時点でのセルフコンパッションが入学後の大学受験のとらえ方に及ぼす影響を検討する。

第7節 本研究の目的と意義

以上より，本研究では，大学生のキャリア形成に対する大学受験のとらえ方の働きとその規定因について検討することを目的とし，その下位目的として以下の5点を設定する。

第1に，大学受験のとらえ方尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討する（研究1）。第2に，個人属性による大学受験のとらえ方の差異について検討する（研究2）。第3に，教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれにおける，大学受験のとらえ方のタイプに

よるキャリア選択自己効力感の差異について検討する（研究 3）。第 4 に、非第 1 志望学生におけるソーシャルサポート、大学適応感、大学受験のとらえ方、キャリア選択自己効力感の関係（Figure 1-1-1）について、第 1 志望学生と比較しながら検討する（研究 4）。第 5 に、大学入学時点で大学受験のとらえ方が否定的な大学生における、入学から数ヵ月後の大学受験のとらえ方に対する入学時点でのセルフコンパッションと入学後のソーシャルサポートおよび大学適応感の働きについて、肯定的な大学生と比較しながら検討する（研究 5）。以上の点の検討により、大学でのキャリア形成支援のために大学受験のとらえ方をより肯定的なものにする必要性を示し、その具体的な支援方策を提言する。

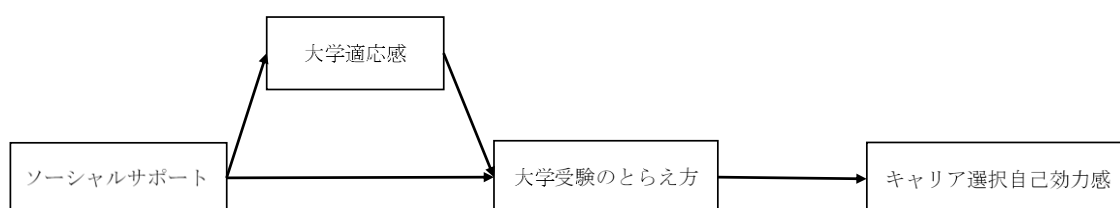


Figure 1-1-1. 研究 4 のソーシャルサポート、大学適応感、大学受験のとらえ方、キャリア選択自己効力感の関係の仮説モデル

注) 入学した大学が第 1 志望だったか否かを基準に群分けし、図中の関係を検討する。

第 2 章 実証的研究

第 1 節 大学受験のとらえ方尺度の開発と過去のとらえ方尺度との対応関係（研究 1）

1. 目的

大学受験のとらえ方尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討する。

2. 方法

調査対象者と調査手続き A 県内の教員養成系大学 1, 2 年生 259 名より有効回答が得られた。調査の実施に際し、個人情報を守り、回答は任意である旨を教示し、倫理的配慮を行った。

調査内容 1. 大学受験のとらえ方：石川（2013）の過去のとらえ方尺度と自由記述に基づき作成した、大学受験のとらえ方尺度の候補項目の 27 項目を使用した。

2. 大学受験を想起した時の情動の強さ：Nakajima & Muto（2006）をもとに、大学受験を想起した時の「嬉しさ」「誇り」というポジティブな情動と、「悲しみ」「抑うつ感」「怒り」「恥」というネガティブな情動の強さを尋ねた。

3. 結果と考察

まず、大学受験のとらえ方尺度の 27 項目について、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、Table 2-1-1 のとおりとなった。また、大学受験のとらえ方の下位尺度の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .69 \sim .89$ となり（Table 2-1-1）、一定の信頼性が確認された。さらに、大学受験のとらえ方と大学受験を想起した時の情動の強さとの相関関係を検討したところ、「連続的なとらえ」と「受容的態度」がポジティブな情動と有意な正の相関関係を示した。また、「否定的態度」と「否定的認識」がネガティブな情動と有意な正の相関関係を、ポジティブな情動と有意な負の相関関係を示した。「わりきり態度」は「悲しみ」とのみ有意な負の相関関係を示した。以上より、大学受験のとらえ方尺度の基準関連妥当性が確認された。

Table 2-1-1 大学受験のとらえ方尺度の因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子 連続的なとらえ ($\alpha = .89$)					
大学受験は自分を成長させてくれた	.86	-.02	.01	.05	-.01
大学受験での出来事は、これからにつながると思う	.86	-.05	-.05	-.03	.05
大学受験があつての、今の自分だと思ふ	.83	.01	-.05	.00	-.01
大学受験でのプラスな出来事は、良い経験だと思ふ	.77	-.14	-.08	.04	.09
大学受験でのマイナスな出来事は、自分の糧になった	.60	-.12	.01	-.09	.03
大学受験を教訓にしている	.53	.31	.25	-.06	-.05
大学受験での出来事から学んでいる	.47	.25	.26	.03	-.10
大学受験でのマイナスな出来事も、今では良く思えることがある	.46	-.12	.20	.11	-.10
第2因子 否定的態度 ($\alpha = .84$)					
大学受験に後悔している	.00	.90	-.06	.07	.00
大学受験に後悔はしていない*	-.01	.77	-.16	-.10	-.13
大学受験を引きずっている	-.11	.68	.12	-.01	.17
第3因子 受容的態度 ($\alpha = .75$)					
大学受験での出来事すべてに、意味があると思つている	.10	-.18	.67	-.03	-.05
大学受験をふり返ることは大切なことであると思ふ	.12	-.05	.63	-.02	-.04
大学受験を忘れないようにしている	.14	-.02	.57	-.03	.13
第4因子 わりきり態度 ($\alpha = .69$)					
大学受験でのマイナスな出来事は忘れてしまうことが多い	.00	-.09	.11	.83	-.11
大学受験のことはあまり覚えていない	.00	-.01	-.17	.64	.01
大学受験でのマイナスな出来事は、忘れるようにしている	-.08	.04	.16	.55	.20
「大学受験は過去のこと」と、わりきっている	.13	.06	-.22	.42	-.01
第5因子 否定的認識 ($\alpha = .82$)					
自分の大学受験はマイナスな出来事ばかりだった	-.01	-.05	.02	-.11	.77
大学受験は否定的なイメージである	.04	-.15	-.11	.03	.66
大学受験での嫌だった出来事が忘れられない	.07	.02	.13	-.15	.66
大学受験をしていた自分が嫌いである	-.10	-.11	.06	.06	.65
大学受験のことはあまり思い出したくない	.02	.16	-.06	.14	.61
大学受験でのマイナスな出来事は、思い出したくない	.07	.31	-.07	.10	.51
因子間相関	F1	—	-.23	.58	-.19
	F2		—	.00	-.15
	F3			—	-.19
	F4				—
	F5				—

*逆転項目

第2節 個人属性と大学受験期の努力の程度による大学受験のとらえ方の差異（研究2）

1. 目的

個人属性による大学受験のとらえ方の差異について検討する。

2. 方法

調査対象者 研究1と同様の教員養成系大学1,2年生259名を分析対象とした。

調査内容 1. 個人属性:学年（1年と2年）や所属課程（教員養成課程とゼロ免課程）、現在の所属大学が第1志望だったか否か（第1志望と非第1志望）などについて尋ねた。

2. 大学受験のとらえ方：研究1で作成した尺度を使用した。

3. 結果と考察

まず、各個人属性による大学受験のとらえ方の差異について検討したところ、非第1志望学生が第1志望学生よりも「否定的態度」と「否定的認識」が有意に高かったなど、性別を除く個人属性で大学受験のとらえ方の下位尺度のいずれかに有意差が認められた。

続いて、学年と第1志望だったか否か、課程と第1志望だったか否かの交互作用による大学受験のとらえ方の差異について検討した。学年と第1志望だったか否かを独立変数として2要因分散分析を行ったところ、非第1志望学生においては、2年生が1年生よりも「受容的態度」が低く、「否定的認識」が高いなど、大学受験のとらえ方が否定的であることが明らかになった。次に、課程と第1志望だったか否かを独立変数とした場合、特に、教員養成課程に所属する非第1志望学生において「連続的なとらえ」と「受容的態度」が低く、「否定的認識」が高いなど、大学受験のとらえ方が否定的であることが明らかになった。以上の結果より、非第1志望学生、特に教員養成課程に所属する非第1志望学生の大学受験のとらえ方をより肯定的なものにする必要性が大きいことが示唆された。

第3節 大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異——教員養成系学生と非教員養成系学生の比較——（研究3）

1. 目的

教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれにおける、大学受験のとらえ方のタイプによるキャリア選択自己効力感の差異について検討する。

2. 方法

調査対象者 教員養成系学生については、研究1と同一の教員養成系大学1,2年生259名を分析対象とした。非教員養成系学生については、A県内の私立大学とH県内の公立大

学の1,2年生246名から有効回答が得られた。

調査内容 1. 大学受験のとらえ方：研究1で作成した尺度を使用した。

2. キャリア選択自己効力感：花井（2008）のキャリア選択自己効力感尺度（「自己評価」「目標選択」「計画立案」「情報収集」「意思決定の主体性度」）を使用した。

3. 結果と考察

まず、教員養成系学生の大学受験のとらえ方をタイプに分類するため、クラスター分析を行ったところ、Figure 2-3-1 のとおりとなり、「肯定」タイプ、「葛藤」タイプ、「大学受験軽視」タイプ、「否定」タイプが抽出された。次に、非教員養成系学生の大学受験のとらえ方をタイプに分類するために、クラスター分析を行ったところ、Figure 2-3-2 のとおりとなり、「大学受験軽視」タイプ、「否定」タイプ、「肯定」タイプが抽出された。教員養成系学生と非教員養成系学生の大学受験のとらえ方のタイプを比較すると、双方の大学生に共通して「肯定」タイプと「大学受験軽視」タイプが抽出された。また、「否定」タイプも抽出されたものの、非教員養成系学生が教員養成系学生よりも大学受験のとらえ方の肯定的な因子が高いという違いが認められた。

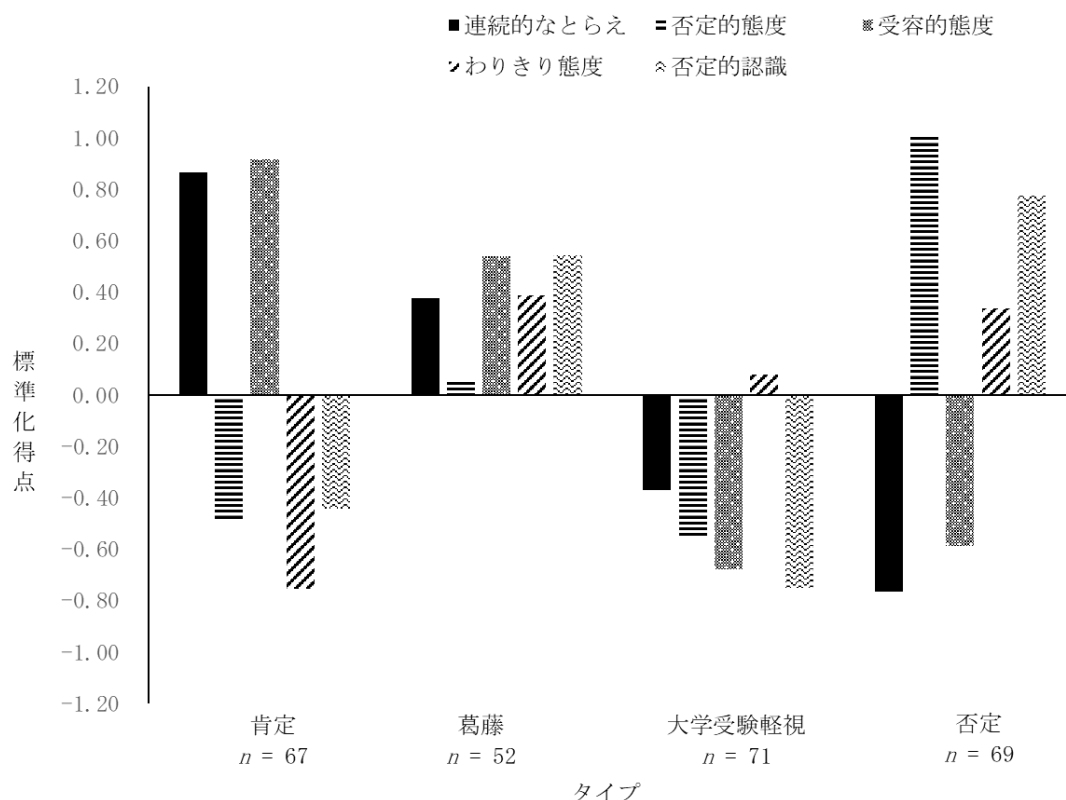


Figure 2-3-1. 教員養成系学生における大学受験のとらえ方の4タイプ

続いて、教員養成系学生と非教員養成系学生のそれぞれにおいて、大学受験のとらえ方のタイプを独立変数、キャリア選択自己効力感の下位尺度を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、Table 2-3-1 のとおりとなった。この結果より、教員養成系学生のうち、大学受験のとらえ方が肯定的な大学生は、否定的な大学生や大学受験のとらえ方に葛藤が見られる大学生よりもキャリア選択自己効力感が高いことが明らかになった。また、非教員養成系学生のうち、大学受験のとらえ方が肯定的な大学生は、大学受験を軽視している大学生よりもキャリア選択自己効力感が高いことが明らかになった。以上より、大学生のキャリア形成を促すために、大学受験のとらえ方を肯定的なものにすることの重要性が示唆された。

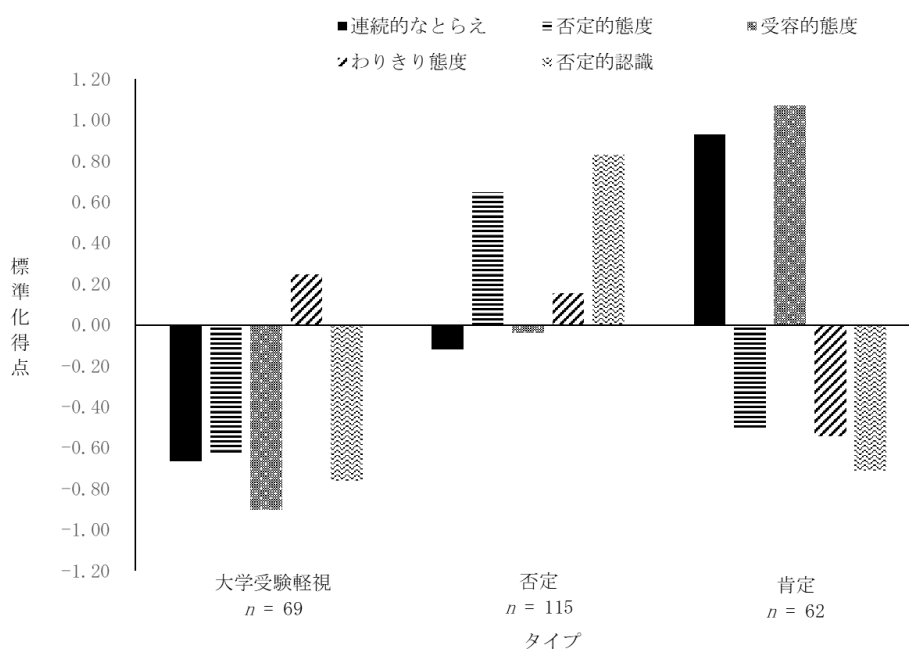


Figure 2-3-2. 非教員養成系学生における大学受験のとらえ方の3タイプ

Table 2-3-1 大学受験のとらえ方のタイプを独立変数、キャリア選択自己効力感の下位尺度を従属変数とした1要因分散分析の結果

	教員養成系学生				F (3, 255)	多重比較	非教員養成系学生			F (2, 243)	多重比較
	1. 肯定 n = 67	2. 葛藤 n = 52	3. 大学受験 軽視 n = 71	4. 否定 n = 69			1. 大学受験 軽視 n = 69	2. 否定 n = 115	3. 肯定 n = 62		
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)			M (SD)	M (SD)	M (SD)		
自己評価	2.96 (0.59)	2.66 (0.44)	2.83 (0.57)	2.79 (0.57)	2.94*	2 < 1	2.81 (0.56)	2.78 (0.52)	2.95 (0.57)	2.03	
目標選択	2.83 (0.74)	2.42 (0.66)	2.57 (0.84)	2.41 (0.75)	4.43**	2, 4 < 1	2.37 (0.66)	2.46 (0.65)	2.66 (0.69)	3.44*	1 < 3
計画立案	2.28 (0.68)	2.14 (0.58)	2.04 (0.60)	1.94 (0.64)	3.54*	4 < 1	2.06 (0.60)	2.24 (0.58)	2.38 (0.70)	4.54*	1 < 3
情報収集	2.67 (0.63)	2.44 (0.59)	2.46 (0.62)	2.55 (0.64)	1.83		2.59 (0.62)	2.70 (0.55)	2.77 (0.69)	1.57	
意思決定の 主体性度	3.27 (0.48)	2.88 (0.59)	3.00 (0.74)	2.89 (0.61)	5.83***	2, 3, 4 < 1	2.67 (0.65)	2.83 (0.59)	3.17 (0.57)	12.05***	1, 2 < 3

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

第4節 非第1志望学生の大学受験のとらえ方を規定する大学適応感とソーシャルサポート——キャリア選択自己効力感につなげるために——（研究4）

1. 目的

非第1志望学生におけるソーシャルサポート、大学適応感、大学受験のとらえ方、キャリア選択自己効力感の関係（Figure 1-1-1）について、第1志望学生と比較しながら検討する。

2. 方法

調査対象者 研究3と同様の私立大学と公立大学の1,2年生246名を分析対象とした。

調査内容 1. ソーシャルサポート：塩澤（2008）の大学生用ソーシャルサポート尺度（「情緒的サポート」と「情報的サポート」）を使用した。

2. 大学適応感：渡辺（2014）の大学適応感尺度を使用した。

3. 大学受験のとらえ方：研究1で作成した尺度を使用した。

4. キャリア選択自己効力感：研究3と同様、花井（2008）の尺度を使用した。

5. 現在の所属大学が第1志望だったか否か：千島・水野（2015）を参考に尋ねた。

3. 結果と考察

現在の所属大学が第1志望だったか否かによる、Figure 1-1-1 の関係の差異を検討するため、学年を統制変数として多母集団同時分析を行ったところ、Figure 2-4-1 のとおりと

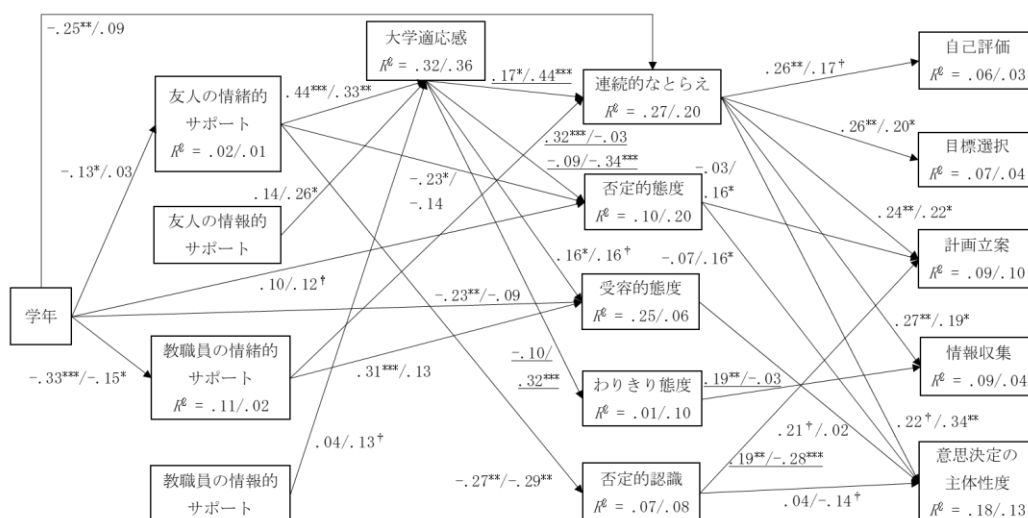


Figure 2-4-1. 第1志望学生を比較対象とした、非第1志望学生における仮説モデルの検証

$\chi^2(142) = 219.731$, GFI = .994, AGFI = .988, CFI = .950, RMSEA = .067, AIC = 9722.266

注1) 図の煩雑さを避けるため、誤差変数は省略した。

注2) 各係数の値について、第1志望学生/非第1志望学生、の順に示した。

注3) 第1志望学生と非第1志望学生との間でパス係数に5%水準で有意差があった箇所に下線を引いた。

$^\dagger p < .10$, $^* p < .05$, $^{**} p < .01$, $^{***} p < .001$

なった。この結果より、非第1志望学生について、大学適応感が大学受験のとらえ方の肯定的な因子に正の、否定的な因子に負の影響を及ぼすこと、大学適応感を高めるために友人の情緒的・情動的サポートが有効であること、友人の情緒的サポートが大学受験に対する否定的認識を直接的に抑制することが明らかになった。以上より、非第1志望学生に対して、友人の情緒的サポートが大学受験の否定的なとらえ方を直接的に抑制すると同時に、大学適応感を媒介して間接的に抑制するという重要な役割を果たすことが示唆された。

第5節 大学受験のとらえ方の変容に寄与するセルフコンパッションとソーシャルサポート——短期縦断的調査による検討——（研究5）

1. 目的

入学時点で大学受験のとらえ方が否定的な大学生における、入学から2ヵ月後の大学受験のとらえ方に対する入学時点でのセルフコンパッションと入学後のソーシャルサポートおよび大学適応感の働きについて、肯定的な大学生と比較しながら検討する。

2. 方法

調査対象者 第1回目の調査（以下、T1とする）と第2回目の調査（以下、T2とする）の双方のWeb調査に参加した、H県内の教員養成課程に所属する大学1年生の65名より有効回答が得られた。

調査内容 1. セルフコンパッション（T1）：宮川・谷口（2016）の日本語版セルフコンパッション反応尺度を使用した。

2. ソーシャルサポート（T2）：研究4と同様の塩澤（2008）の尺度を過去形に修正して使用した。

3. 大学適応感（T1とT2）：研究4と同様の渡辺（2014）の尺度を使用した。

4. 大学受験のとらえ方（T1とT2）：研究1で作成した尺度を使用した。

3. 結果と考察

分析に先立ち、大学受験のとらえ方の各下位尺度（T1）について、平均値を基準に高群と低群に分類した。

まず、大学受験のとらえ方の各下位尺度（T1）の高群と低群ごとに、「セルフコンパッション（T1）」と「大学適応感（T2）」を説明変数、大学受験のとらえ方の下位尺度（T2）を目的変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行ったところ、「否定的態度（T1）」と「否定的認識（T1）」の高群において、それぞれ「セルフコンパッション（T1）」が「否定

的態度 (T2)」と「否定的認識 (T2)」に有意な負の影響を示した。この結果より、入学時点で大学受験のとらえ方が否定的な大学生の場合、入学から2ヵ月後の大学受験の否定的なとらえ方を緩和するために、セルフコンパッションが一定の働きを示すことが明らかになった。

次に、大学受験のとらえ方の各下位尺度 (T1) の高群と低群ごとに、ソーシャルサポートの下位尺度 (T2) と「大学適応感 (T2)」を説明変数、大学受験のとらえ方の下位尺度 (T2) を目的変数とした場合、大学受験のとらえ方が否定的な群では、ソーシャルサポートや大学適応感が大学受験のとらえ方のいずれの因子とも関連を示さず、研究4とは異なる結果となった。入学時点で大学受験を否定的にとらえている大学生に対し、大学内のサポートや大学適応感よりも、セルフコンパッションの働きが重要であると考えられる。

第3章 総合考察

本研究のまとめと研究結果に基づいた提言

本研究では、大学生を対象として、大学受験のとらえ方尺度を開発した上で (研究1)、個人属性による大学受験のとらえ方の差異 (研究2)、大学受験のとらえ方のキャリア選択自己効力感に対する働き (研究3)、大学受験のとらえ方が否定的な大学生にとって、そのとらえ方を変えるために必要な大学内の友人の支援の内容 (研究4) と、そのプロセスにおけるセルフコンパッションの働き (研究5) が明らかになった。

本研究は、大学入学後の大学受験のとらえ方が肯定的な大学生ほど、キャリア選択自己効力感が高いことを実証的に示した初めての研究である。この結果より、非第1志望学生のように、大学受験のとらえ方が否定的な大学生にとって、彼らのキャリア形成を促すために、大学受験のとらえ方をより肯定的なものにすることの重要性が示唆された。

また、大学受験のとらえ方が否定的な大学生に対して肯定的に変えるための有効な大学内の友人の支援の内容と、そのプロセスにおけるセルフコンパッションの働きを明らかにした。この点に基づき、大学生のキャリア形成支援に携わる教職員が実施可能な支援方策として、例えば、ピアサポートを充実させることが挙げられる。また、セルフコンパッションを高めるプログラムの提供も支援方策の1つとして挙げられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として、以下の3点が挙げられる。第1に、研究5では、教員養成系学生65名という限定されたサンプルを対象とした点が挙げられる。今後、サン

ルサイズを拡大するなど、研究5の知見の一般化を図る必要がある。第2に、本研究では最終変数としてキャリア選択自己効力感を設定したが、それ以外の変数を取り上げなかった点が挙げられる。大学生のキャリア形成に対する大学受験のとらえ方の働きについて検討するにあたり、キャリア形成の指標として、キャリア選択自己効力感のみを取り上げるのでは不十分であろう。今後、例えば、青年期の主要な発達課題であるアイデンティティ形成などを取り上げ、それに対する大学受験のとらえ方の影響を確認することにより、大学生のキャリア形成を促すために、大学入学後の大学受験のとらえ方に着目することの重要性がさらに強調されるであろう。第3に、本研究では、質的な検討が不足している点が挙げられる。今後、半構造化面接などを用いて、大学生自身の言葉から大学受験のとらえ方を捉えることも課題になるであろう。

引用文献

- 安達 智子 (2001). 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討——
教育心理学研究, 49, 326-336. doi:10.5926/jjep1953.49.3_326
- 安達 智子 (2006). 大学生の仕事活動に対する自己効力の規定要因 キャリア教育研究,
24, 1-10. doi:10.20757/jssce.24.2_1
- 千島 雄太・水野 雅之 (2015). 入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応
に及ぼす影響——文系学部の新入生を対象として—— 教育心理学研究, 63, 228-241.
doi:10.5926/jjep.63.228
- 花井 洋子 (2008). キャリア選択自己効力感尺度の構成 関西大学大学院人間科学, 69,
41-60.
- Hope, N., Koestner, R., & Milyavskaya, M. (2014). The role of self-compassion in goal
pursuit and well-being among university freshmen. *Self and Identity*, 13, 579-593.
doi:10.1080/15298868.2014.889032
- 石川 茜恵 (2013). 青年期における過去のとらえ方の構造——過去のとらえ方尺度の
作成と妥当性の検討—— 青年心理学研究, 24, 165-181.
doi:10.20688/jsyap.24.2_165
- 石川 茜恵 (2019). 青年期の時間的展望——現在を起点とした過去のとらえ方から見
た未来への展望—— ナカニシヤ出版
- 宮川 裕基・谷口 淳一 (2016). 日本語版セルフコンパッション反応尺度 (SCRI-J) の

- 作成 心理学研究, 87, 70-78. doi:10.4992/jjpsy.87.14220
- Nakajima, Y., & Muto, T. (2006). Impact of compensatory secondary control on the recollection of emotions and the self in respect to past adversity. *Japanese Psychological Research*, 48, 46-53. doi:10.1111/j.1468-5884.2006.00305.x
- Neff, K. D. (2003). The development and validation of a scale to measure self-compassion. *Self and Identity*, 2, 223-250. doi:10.1080/15298860309027
- 小山田 暖果・児玉 真樹子・大塚 泰正 (2013). ソーシャルサポートが教員養成課程に所属する教職志向の低い大学生の学校適応感に及ぼす影響 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 12, 38-50. doi:10.15027/35614
- 塩澤 聖子 (2008). 大学新入生を調査対象とした大学生用ソーシャルサポート尺度の作成 学校メンタルヘルス, 11, 33-42.
- Smeets, E., Neff, K., Alberts, H., & Peters, M. (2014). Meeting suffering with kindness: Effects of a brief self-compassion intervention for female college students. *Journal of Clinical Psychology*, 70, 794-807. doi:10.1002/jclp.22076
- Taylor, K. M., & Betz, N. E. (1983). Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81. doi:10.1016/0001-8791(83)90006-4
- Watanabe, H. (2017). The mediating effects of benefit finding on the relationship between the identity centrality of negative stressful events and identity achievement. *Identity*, 17, 13-24. doi:10.1080/15283488.2016.1268536
- 渡辺 舞 (2014). 大学生の友人関係は変化するか?——大学4年間の追跡的検討による大学適応感との関連について—— 北星学園大学大学院論集, 17, 67-81.